

国語教育専攻用

国語

(90分 200点)

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答にはHBまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはHBまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- ③ **マーク式の解答用紙**には、マーク式で解答しなさい。氏名、受験番号、科目を記入する欄と受験番号、解答科目をマークする欄に必要事項を記入してから、解答を始めます。例えば、**マーク式** **10**と表示のある問いで③と解答する場合は、下の（例）のように**解答番号10の解答欄の③**にマークしなさい。
- ④ **記述式の解答用紙**には、記述式で解答しなさい。氏名、受験番号を記入する欄に必要事項を記入してから、解答を始めます。例えば、**記述式** **2**と表示のある問いで解答する場合は、**2**の枠内に解答を**記述**しなさい。**枠外にはみ出したものは無効**とします。
- ⑤ いずれの解答用紙にも、**必要以外**のことを記した場合、その用紙にある**すべての解答を無効**とします。
- ⑥ 試験中に、問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高くあげて監督者に知らせなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

※ 出題の都合により、本文の一部を改めた場合がある。

国

語

【一】 次の文章は『浜松中納言物語』の一節で、母君の死後吉野で喪に服している姫君に、中納言が使者を遣わす場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えなさい。

み吉野へ人たてまつり給ふ。添へ給へる人々にも、このほどのアおほつかなき、かへすがへす書き給ひて、「御前去らず、よくなぐさめたてまつれ。その日ばかりに a なむ、御迎へにたてまつるべき」とて、さぶらふ人々も、ひきつくるふべき用意などさへ、いたらぬ I くまなくおぼし寄り、姫君の御もとは、

消えかへり思ひやるとは知る b らめや吉野の山の雪の深さをとある御返し、(注1)青鈍の紙に、

A ふるままにかなしさまさる吉野山うき世いとふとたれたづねけむ

墨つき、筆の流れ、まことしう上衆めきてうつくしきを、かたちはさこそ、前の世の功德の報いなら II め、さる、イびたぶるに世を棄て給へりし(注2)上の御かげにて、いとかう手をさへ書きすぐり給ひけむと、あさましきまで、うち置きがたく見給ふ。

かしこにはまらうと、「そのほどには御迎へにおはしぬべかんなり」とて、ふる人たちにさる用意せ c させ、「御装束は、いまもておはししなむ。御衾をなつかしかりぬべく」など、よろづにいそぎたるを、言はむかたなく心細く、もの恐ろしきかたは、げに、

「(注3)さそふ水あらば」と思ひぬべけれど、この山をあくがれ出でむ行く末知らず、B あとはかまなき身のありさまなれば、いかでかはと聞き給へれど、さかしう、ともかくも言ひ出づべきかたもなし。もとよりの人とても、思ひやりありて、げに、ウなつかしう言ひ

合はすべき人もなし。人わろく思ひわびにたる心には、のち、行くさきのことたどりも知らず、いづちも、いとかくは、けしからぬ世界に行き離れ III なばと、ひとへに思ひよろこびたるも、あはれに口惜しく、ただ心ひとつに思ひあまり、この若き人のなつかしき

にぞ、「かれへ出でさせ給ひなむ時に」など言ふついでに、「かかる色のほどは、これより深くもこそ思ふを、いかでか浅くはなるべきにか」とばかり涙のこぼれ d ぬるを、(注4)母君にまねびやし IV けむ、中納言のおはしたるに、C さなど聞こゆれば、いみじうつ

つましげなる几帳押しやりて、「かぎりなくおぼつかなう思ひあまりて、つねよりもわりなき細道を、そぼちつつ御迎へにまゐり来つるを、これより深くもと、もの憂げなる御けしきにはべるとか。これより深くたづね入るころざしもこそ」と、いみじうにほひやか

にほほゑみ給へるはづかしきに、汗になりて、聞こえむかたもおぼされず。心ひとつには、住み馴れしところをさし離れて、行く末も知らずあくがれ出でむ、D いとすずるに、心細さもまさりぬべけれども、われと言ひ出づべきかたなくはづかしきに、おしこめて、思

ひやすらふかたもなく、ひたぶるに身をまかせたるも、あはれに心苦しうて、泣き給ふよりほかのことなし。

(注) 1 青鈍——青みがかった薄墨色。喪中の色。

2 上——姫君の故母君のこと。

3 さそふ水あらば——「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」(『古今和歌集』小野小町)の和歌を踏まえた表現。

4 母君——ここでは、姫君の世話をしている乳母の妹のこと。

問1

「a なむ」、「b らめ」、「c させ」、「d ぬる」の助動詞及び助詞の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 1 ～ 4。

「a なむ」	「b らめ」	「c させ」	「d ぬる」
1	2	3	4
① 疑問	① 未来推量	① 使役	① 過去
② 強意	② 過去推量	② 尊敬	② 打消
③ 反語	③ 現在推量	③ 謙譲	③ 強意
④ 願望	④ 伝聞	④ 願望	④ 並立
⑤ 区別	⑤ 婉曲	⑤ 婉曲	⑤ 完了

問2

で囲んだ活用語 I ～ IV の本文における活用形として最も適当なものを、あとの① ～ ⑥の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じものを重ねて用いても構わない。解答番号は、マーク式 5 ～ 8。

I くまなく

5

II め

6

III な

7

IV けむ

8

① 未然形

② 連用形

③ 終止形

④ 連体形

⑤ 已然形

⑥ 命令形

問3 「アおほつかなさ」「イひたぶるに」「ウなつかしう」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ

一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 9 ～ 11。

「アおほつかなさ」

9

「イひたぶるに」

10

「ウなつかしう」

11

- ① もどかしいこと
② はつきりしないこと
③ かすんでいること
④ 気がかりなこと
⑤ 待ち遠しいこと

- ① しきりに
② のどかに
③ 一途に
④ 頻繁に
⑤ かるうじて

- ① 親身に
② なれ親しんで
③ 離れがたく
④ 昔に戻って
⑤ 目新しく

問4 「A ふるままにかなしさまざる吉野山うき世いとふとたれたづねけむ」の和歌に使われている修辞技法として最も適当なものを、

次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 12。

- ① 序詞 ② 枕詞 ③ 縁語 ④ 掛詞 ⑤ 体言止め

問5 「B あとはかまなき身のありさまなれば、いかでかはと聞き給へれど」を、主語を補って現代語に訳しなさい。解答番号は、記述式 1。

問6 「C さなど聞こゆれば」とあるが、ここにおける状況の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 13。

- ① 母の喪に服している間は色の濃い喪服を着たいのに、どうして淡い色の喪服に着替えるのかしらと姫君が話していたことを、中納言に申し上げた。
- ② 母の喪に服している間はより奥深い場所に行きたいのに、どうして里近い所に移っていいのかしらと姫君が話していたことを、中納言に申し上げた。
- ③ 姫君が母の喪に服している間は将来のことも想像がつかないので、ましな場所に移れたら嬉しいと古女房が話していたことを、中納言に申し上げた。
- ④ 姫君が母の喪に服している間は吉野山をさまよい出ても行く先もないので、とやかに言えないと古女房が話していたことを、母親にそのまま伝えた。
- ⑤ 母の喪に服している間は難儀な細道を分け入って奥深い場所まで中納言に迎えに来て欲しいのにと姫君が話していたことを、母親にそのまま伝えた。

問7 「D」とすずるに、心細さもまさりぬべけれども」を現代語に訳しなさい。解答番号は、**記述式 2**。

問8 本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式 14**。

- ① 中納言は吉野にいる姫君に「何日ぐらいにお迎えに人を差し上げましょう」という手紙を書いた。
- ② 姫君は吉野の暮らしが恐ろしいので、誘ってくれる人がいればどこへでも行こうと思っている。
- ③ 姫君は上京の用意が着々と進んでいくのを見て、言いあらわしようもなく心細く思っている。
- ④ 中納言は姫君が吉野より奥深く移り住むなら、更に奥深くまで探し求める意志があると伝えた。
- ⑤ 中納言は姫君の筆跡が正統で上流の人のようにきれいなのは、姫君の故母君のお陰と思っている。

問 9 『浜松中納言物語』と成立年代・時期が最も近い作品を次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** **15**。

① 十六夜日記

② 竹取物語

③ 更級日記

④ 方丈記

⑤ 平家物語

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

社会科学のうちで、^(注1)標準的教科書の創出に成功したのは、近代経済学において他に見当たらない。政治学、社会学などの分野にも教科書はあるにはあるが、とても「標準的」^{スタンダード}と言うには値しない。近代経済学の場合、たとえば、これまでに米国で刊行されたマクロ経済学の教科書は、玉石とりまぜて数十冊に及ぶであろう。これらの教科書は、用語と方法において共通であることは言うに及ばず、内容の大筋においても大同小異である。おなじ内容のことを、いかに効率よく読み手に習得させるかが、良い教科書と悪い教科書の選別基準となる。

政治学や社会学の場合、用語や方法の統一は **a** ^な ^お ^未 ^だ ^し ^の ^感 ^が ^あ ^る ^し、たとえ教科書といえども、著者の個性や思想が随所にあられ、すぐれて個性的な著作という趣きがつよい。流儀の異なる経済学、たとえばマルクス経済学や制度学派の経済学にしても、こと教科書にかんするかぎり、むしろ社会学や政治学に近い状況にある。

標準的教科書が存在しないということは、言いかえれば、教育が「規格化」^A ^さ ^れ ^て ^い ^な ^い ^こ ^と ^を ^意 ^味 ^し、そうした分野では、「教師は教室で自説を学生に説く」^A ^の ^が ^あ ^た ^り ^ま ^え ^の ^姿 ^と ^な ^る。また多くの場合、経典を徹底的に解説することが、初学者にとつての課題とされるのである。

いったん教科書が成立すると、学術論文というものの意味もはっきりしてくる。すなわち、教科書に書かれていることは、学界内部で共有されている知識である。**X** [、] ^教 ^科 ^書 ^に ^書 ^か ^れ ^て ^い ^な ^い ^こ ^と ^を ^新 ^し ^く ^つ ^け ^加 ^え ^る ^こ ^と ^が、^{オリジナル} ^の ^論 ^文 ^の ^必 ^要 ^条 ^件 ^と ^さ ^れ ^る。また、論文を著す際、教科書に書かれていることは、自明の前提とみなしてさしつかえない。すなわち、学術論文において、前提となる教科書の知識をいちいちくり返して述べる必要はない。そのため、学術論文は、きわめて簡潔なのが通常である。少なくとも米国の経済学界では、自然科学界と同様に、学術論文を教多く著すことが「業績」の尺度とされており、書物を著すことは、自らの仕事を大成する上では有意義であっても、「業績」評価の上ではあくまで副次的としかみなされない。

学術論文を掲載する雑誌は、^(注2) ^レ ^フ ^エ ^リ ^ー ^制 ^を ^採 ^用 ^す ^る ^こ ^と ^が ^義 ^務 ^づ ^け ^ら ^れ ^て ^い ^る。言いかえれば、**□** ^と ^い ^う ^ル ^ー ^ル ^が、アメリカの経済学界においては、しかと確立しているのである。学術論文の〈数〉による業績評価が、昇進、昇給、研究費配分などの決め手となることは言うまでもない。

結局のところ、学術論文の〈数〉に基づく業績評価と、それを基礎とする学界の秩序維持というシステムが、アメリカ経済学界にお

いてうまく機能するのは、経済学が唯一の「教科書化」された社会科学であるからにはほかならない。「教科書化」が未完成の分野では、専門誌と非専門誌の境目すら判然とはしない。そのため、何が学術論文であり何がそうでないかを示す、明確な基準を定めることもむずかしい。その結果として、政治学や社会学は、経済学のように完璧には「制度化」されておらず、良きにつけ悪しきにつけ、依然として、十九世紀ヨーロッパ社会科学の流儀を色濃く残しているのである。

さて、社会諸科学のなかで、ひとり経済学のみが「教科書」を成立させ、自然科学や技術なみに「制度化」されたのは、いったい何故であろうか。その理由を一言で述べるとすれば、経済学において数量的方法が「有効」であったからである。つまり、社会の「第一性質」のみを対象とする経済理論が、少なくとも一時期、ある文化圏において、かなりの「現実味」を發揮しえたからにはほかならない。さらにもう一言つけ加えるならば、数式の体系（「モデル」）に現実経済をうづついて、その体系に数学的演繹をほどこしてなんらかの「有意味」な命題を導く、という古典力学の方法を、忠実に踏襲することによって、それなりの現実味ある理論体系を作ることになったからこそ経済学は、社会科学としてはすこぶる特異的な展開を遂げたのである。

ちなみに、標準的と言われる経済理論の教科書を一冊とりだしてみよう。簡単な序論に続く第一章には、たいてい「消費者行動の理論」という題が付されている。その中味は何かというと、まず「効用」と「効用関数」に始まり、「無差別曲線」、「限界効用」、「顕示選好」等々、日常の消費生活とは、一見しても二見しても、ほとんど脈絡のつけがたい用語（ジャーゴン）が次々に登場してくる。これらの用語には、もっぱら数学的な定義があたえられる。たとえば、消費する諸財の量の関数として「効用」が測られ、その関数の導関数が「限界効用」であり、同一の効用を与える諸財の消費量の組み合わせの軌跡が「無差別曲線」である。そして、これらの分析装置を用いて、消費者行動の数学的分析が理路整然とすすめられ、おそらくは「有意味」(meaningful)な「定理」が、続々と導出されるのである。

このような「理論」を理解するためには、初等的な微積分の知識をもちあわせておれば十分であって、消費経済にかんする実態的な知識のあるなしは、理解の深浅にほとんど関係しない。いわんや、スーパーマーケットにでむいて消費者の「行動」を観察するなどというフィールド・ワークは、経済理論の理解に資するところ、まったく皆無なのである。

つまり、いくらか誇張気味の述べ方をすれば、**B** 大学における経済学の教育は、日常的消費生活を営む人びとにとってほとんど想像を絶するような「分析装置」を用いての消費経済の分析、すなわち消費者行動の「モデル分析」から始まるのである。

「一般性」を重んずる経済学においては、時間と場所と **b** 不可分の実態経済にかんする叙述は、「理論」の教科書の題材としてふさ

わしくない、と考えられている。教科書に書かれているのは、時間と場所を超えて成りたつはずの一般性をもつ（モデル）と、それに基づく（モデル分析）なのである。

（モデル）とは、ラテン語の「モドゥス」(Modus) に由来し、中世においては建築につかわれる測定単位であった。それにもとづいて「製作すべき見本」という意味で使用されるようになったのは、十六世紀のイタリアにおいてであったと言われる。その後、技術や科学の領域でも、（モデル）という概念がさかんに用いられるようになった。理論物理学における「素粒子モデル」や化学における「分子モデル」など、科学的認識と発見の歴史において、モデルが数々の重要な役割を果たしてきたことは、周知のとおりであろう。

（モデル）の日本語訳は「模型」である。模型というからには、それが模する「原型」が実在してはじめて意味をもつ。玩具のプラモデルの原型は、海に浮かぶ船舶や空を飛ぶ飛行機である。

いくら形式的な言い方をすれば、（モデル）とは原型の写像であり、しかも原型の要素ないし部分間に成りたつ「ある関係」を保持させるような写像である。たとえば、船舶のプラモデルは、原型のかたちを相似形として保持する写像であり、機能とか素材という側面を無視してできあがった（モデル）である。

アメリカのノーベル賞生物学者ワトソンは、固くて変形しないプラスチックの球と針金を用いて分子構造の模型を組み立てることにより、あらゆる実験結果と矛盾しないDNA（デオキシリボ核酸）の構造は二重らせん以外にありえないことを予測した。用いられた球や針金は、素材においても物理化学的性質においても、もとの原子や分子とは似ても似つかない。Cにもかわらず、それらを用いて作られた模型は、ある構造・関係において「原型」との同一性を保持するがゆえに、（モデル）としての十分な発見的役割を果た

しえたのである。だからこそ、何の変哲もない球と針金の（モデル）が、分子生物学史上最大といわれる発見をもたらしたのである。

自然現象であれ社会現象であれ、現実の構造・関係がいちじるしく、錯綜的であるからこそ、当面の分析にとって本質的な構造・関係のみに着目し、非本質的な部分を「オッカムの剃刀」^{かみそり}（十四世紀のスコラ学者オッカムの名に由来し、なるべく単純な説明原理を良しとする立場を表す）によって切り落とした（モデル）を構成することが必要となる。対象がおなじであっても、分析目的が変われば、分析に供される（モデル）もおのずから変更を迫られることになる。Y いったん分析目的を忘れてしまえば、いかなる（モデル）であれ、多かれ少なかれ非現実的に見える。

（佐和隆光『経済学とは何だろうか』による）

(注) 1 標準的教科書——「教科書」とは、大学の授業用テキストを指す。大学には学習指導要領や教科書検定の制度がないため、各大学では最新の研究成果を踏まえて学生に教育する目的で、各研究者が自律的に教育内容を練り、個人やグループで執筆したテキストを使用するのが通例である。そのため、同じ科目でも執筆者ごとに内容に差が生じ、標準的なものが生まれにくい。

2 レフェリー制——学術雑誌に投稿された論文の内容を査読者 (referee) が審査し、当該誌に掲載するか否かを判定する制度。査読制度、審査制ともいう。

問 1

17 X

Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 16

X

16

- ① したがって ② しかしながら ③ あるいは ④ ところで ⑤ ちなみに

Y

17

- ① ところが ② 要するに ③ また ④ ゆえに ⑤ さて

問 2

20

波線部 a、b、c の本文中での意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、マーク式 18

a 「なお未だし」

18

- ① まだ準備が整わない ② まだ始まって間がない ③ まさに最中である
④ 今でも進行中である ⑤ 今でも完了しない

b 「不可分の」

19

- ① 検討点が多くてさばけない ② 要素が入り組み分析できない ③ 努力が足りず水準を保てない
④ 結びつきが強くて切り離せない ⑤ 問題が大きくて処分できない

「**C** 錯綜的である」

20

- ① 実際とは違って知覚される
- ② 事実と反することを事実と思いつむ
- ③ 思考に混乱を及ぼす状態である
- ④ 複雑に絡み合う
- ⑤ 規範から外れた行動をとる

問 3

「**A** 学説の創始者の著作が唯一無二の經典とみなされ、その經典を徹底的に解読することが、初学者にとっての課題とされる」とあるが、それはどういうことか。「**經典**」「**徹底的に解読**」「**初学者**」の指す意味をそれぞれ明らかにしながら、**九〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 3**。

問 4

□

に入る言葉として文脈上最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式 21**。

- ① 学術論文を掲載しない雑誌はレフェリー制を採用しなくてもよい
- ② 学術論文を掲載しない雑誌はレフェリー制を採用してはならない
- ③ レフェリー制を採用しない雑誌に掲載される論文は学術論文と認めない
- ④ レフェリー制を採用しさえすればいかなる雑誌も学術雑誌と認める
- ⑤ レフェリー制の採用いかに関わらず質が保証できない学術論文は雑誌に掲載されない

問 5

「**B** 大学における経済学の教育は、日常的消費生活を営む人びとにとつてはほとんど想像を絶するような『分析装置』を用いての消費経済の分析、すなわち消費者行動の『モデル分析』から始まる」とあるが、筆者の考えでは、それはなぜか。**九〇字以内**で説明しなさい。解答番号は、**記述式 4**。

問6

「C」にもかかわらず、それらを用いて作られた模型は、ある構造・関係において「原型」との同一性を保持するがゆえに、「モデル」としての十分な発見法的役割を果たしたのである」とあるが、この一文が文章の中で果たす働きとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 22。

- ① 〈モデル〉の価値を裏づけ、直前の文で示す性質を備えるがゆえに直後の特徴が生じる仕組みを読者に評価させる働き。
- ② 〈モデル〉の役割について、直前の文で示す事例とは逆の結果を含む事例を示し、驚きや意外性を読者に印象づける働き。
- ③ 〈モデル〉の可能性を挙げ、直前の文で示す主張と直後の文で示す主張の双方を補強して、読者を強く説得する働き。
- ④ 〈モデル〉の特徴をめぐって、直前の文で示す役割と直後の文で示す結果との差を比べ、両者の相違点を明確にする働き。
- ⑤ 〈モデル〉の本質を述べ、直前の文で示す特徴があっても直後の文で示す結果を支障なく果たせた理由を解説する働き。

問7

本文の主旨と合致するものを次の中から一つ選びなさい。解答番号は、**マーク式** 23。

- ① マクロ経済学の教科書は、玉石とりまぜて教十冊に及ぶので、良い教科書と悪い教科書の選別に大変手間がかかる。
- ② 政治学や社会学は、良い教科書を、経済学のように生み出すことができていない。
- ③ 「一般性」を重んずる経済学においては、一般性をもつ〈モデル〉と、それに基づく〈モデル分析〉の記述が重視される。
- ④ 船舶のプラモデルは、機能とか素材という側面を無視してできあがった〈モデル〉であり、モデルとして不適切である。
- ⑤ 非本質的な部分を「オツカムの剃刀^{かみそり}」で切り落とした〈モデル〉は、本質の体現には至らず、分析目的ごとに変更を迫られる。

三 次の文章は砂原浩太朗の小説『まゆずみ 家の兄弟』の一節で、神山藩で代々筆頭家老を務めるまゆずみ 家の三男・新三郎が、大目付を務める黒沢家に婿入りすることが決まり、しゅうと 舅となる織部正に伴われて評定所に行ったあとの場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

おそろおそろ上げた眼差まなしに、はっきりした怯おびえが刻まれている。男は三十半ばと聞いていたが、面やつれが激しいためか、十以上も老けて見えた。障子は閉めきつているが室内はほの明るく、まだ昼には間のある陽光が、その姿を

十二畳ばかりのひと間で男と対座しているのは、目付役筆頭の久保田治右衛門じえもんだった。こちらは三十を出たばかりというが、眉の濃い **a** 精悍せいけんな面ざしをしており、全身から雄鹿のような精気が匂い立っている。新三郎は、黒沢織部正と肩をならべ、かたわらで裁きのようすを見守っていた。

神山藩の評定所は、二の丸の南にひっそりとたたずんでいる。一見すると隠居所のようなものさびた造りだが、さまざまな罪科に問われた藩士がここへ召し出され、目付の訊問じんもんを受けるのだった。

織部正は大目付であるから、上級家臣の行状を監視するのがつとめである。きょう裁きの座にあるのは三十石どりの軽輩だが、新三郎に見せるため、とくに立ち会っているのだった。

「婿入り前から熱心だの」

受け入れた久保田も戸惑っているふうだったが、それは新三郎もおなじだった。嫌というわけではないが、こうしたことは黒沢の家に入ってからするものではないかと思える。

「茂太しげたのやつ、ずいぶんと熱が入っておるな」

裁きに立ち会うと聞き、父がそうつぶやいたのは三日ほどまえである。ひさしぶりに早く帰宅した夕餉ゆうげの折だった。

茂太郎というのが織部正の幼名で、前髪立ちのころから旧知の仲だと聞く。いまでも何かの拍子に、その呼び方が出るのだった。清左衛門が、どこか遠い目になってつぶやく。

「そなたを早く一人前にしたいのだろう」

「はい——そう思います」

汁椀と箸を置き、父を見つめた。どういう気まぐれか壮十郎も屋敷にいて、兄弟三人で清左衛門を仰ぐかたちとなる。
「気が重いか」

栄之丞が世間話のような口調で問うた。新三郎は困ったようにこうべをかしげる。
「いくらかは」

おれなら面倒くさくてしかたないな、と壮十郎がひとりごとめかしている。父が睨むように眉を寄せると、首をすくめて立ち上がった。わざとなのかどうか、踏みだした足が膳にかかり、倒れた椀から汁が畳に飛び散る。

「壮十郎っ」

清左衛門の叱声が場を低くつらぬいた。次兄は舌打ちだけ残し、そのまま部屋を出ていく。じき玄関のあたりで、若さまっ、いずこへ行かれますると慌てた声があがった。家宰の近江五郎兵衛だろう。つづいて、荒々しく戸の開け閉めされる音が耳の奥に刺さった。そらぞらしいまでの沈黙が居間にひろがる。父は苦々しげに溜め息をこぼすと、新三郎につよい視線を向けてきた。あまりのするどきに、おもわず瞳をそらしてしまう。

「A ひとの心もちには応えよ」

ひとことずつ区切るようにして、清左衛門がいった。息がみだれるのを感じながら、おそろおそろ眼差しを向ける。いくぶん茶がかった瞳は、すでにしずかな色を取りもどしていた。

「応えんとしているうちに、多くを得る」

父の言が残らず **b** に落ちたとはいえぬが、いまは織部正の求めるまま動いてみる気になっている。いずれ舅となれば、命にしたがわねばならぬのだから、すこし早まっただけでもいえた。

新三郎は、**B** 三間ほどむこうで背を縮める男をあらためて見つめた。いつのまにか、その上体が小刻みに震えだしている。が、久保田は、ためらう気ぶりもなく声を高めた。

「五年で十両——相違ないな」

はっ、と洩らした声が滑稽なほどか細い。男は勘定方の下役で、何年にもわたって公の金を懐へ入れつづけてきたという。が、目のまえで居竦まる様子はさながら叱られた幼な子のように、大それたことを仕出かした者には見えなかった。

口中にひどい渴きをおぼえる。男の強張りが取りついたかのごとく、全身がぎこちなく固まり、節々に痛みさえ感じるほどだった。かすかな耳鳴りを圧えつづけるかのように、詮議のやりとりが容赦なく響きわたる。

「何を何に用いたるか」

「た、生活の足しでございます。決して、それ以外のことには」

男は頬のあたりを引きつらせて言いつのつたが、久保田はおもい声を返したただけだった。

「お扶持をいただいておろう」

「おそれながら」頭を揺らしたかと思うと、突然、両手で月代を搔きむしる。怯えにまみれながらも、どこか太々しさをにじませた口調で語を継いだ。「お扶持だけでは、とうてい暮らしが立ちゆきませぬ」

「暮らし……」

つぶやくと、ひと膝まえに進みでる。男は気圧されたていで上体をくずし、畳に片手をついた。追い打ちをかけるように、久保田がするどく言葉突きつける。

「内証のくるしきは、そなただけではあるまい」

「さ、されど」

男が声を裏返らせるのと同時に、新三郎はきつく目を閉じた。手のひらが痛くなるほど拳を握りしめている。瞼をひらくと、久保田の指先がその懐に入るところだった。紙切れのようなものを取りだすと、ひらいて胸のまえにかざす。一拍おいて、男が悲鳴じみた声を洩らした。

「これも生活の足しか」**Y**「告げながら、紙に目を落とす。「どう見ても賭場の証文だな」

紙片をふたたび懐におさめ、男の全身を見据えた。射抜くような声を放つ。

「山路作左衛門、その罪明白なるをもって切腹、お家断絶申しつける」

男の顔から溶けるようにして表情が失せた。白茶けた唇がふるふると揺れ、全身に痙攣がひろがってゆく。新三郎が息をひそめているうち、駄々をこねるような叫びがあがった。

「そ、それでは、妻子こそって飢え死にいたすほかなく」

「気の毒と思わぬわけではないが」久保田はいったが、そのことばに一片の同情もふくまれていないことはすぐ分かった。「そのこととお裁きとは別である」

ひゅっ、と風の鳴るごとき音が男の喉から零れる。そのまま、追い立てられるように声を張り上げた。

「子がお申す——五人でござる」

新三郎がおぼえず唾を呑むと、まるでその音が聞こえたかのように、**Z** 滾る瞳がこちらへ向けられた。にじり寄りらるばかりにして、骨ばった指をのばしてくる。

「跡取りは、そちら様とおなじ年ごろにて」

男の腕が絡みついてくるような心地におそわれた。身をちぢめ、ひたすら袴のあたりを見つめる。喉はすでに痛いほど干上がった。いた。

「なにとぞ、なにとぞ」

声か亡者のように追いついてくる。耳をふさぎたかったが、手が動かぬ。痺れた頭の片隅で、なにかが瞬くのおぼえたが、それを見据えることもできなかつた。

久保田がやるせなげな吐息をつく。

「——引つ立てよ」

声に応じて襖が開き、次の間から下役たちがあらわれる。左右から咎人の袖をおさえ、立つようにうながした。山路は言われるまま、のろのろと身を起こしたが、

「おなじ齢でござる、おなじ齢で……」

呆けた口調で繰りかえしながら、うつろな目で新三郎を見つめている。そのまま座敷から連れ出されていった。

気がつくとき袴のあたりに日が差し、まだ新しい濃紺の色をくっきりと浮き上がらせている。ようやく面をあげると、山路を引き立てる際にひらかれたのだろう、庭へつづく障子戸が大きく開け放たれ、一隅にかたまって咲く萩の白さが、まぶしいほどに目を射た。青くひろがる天のどこかから、椋鳥の啼き声が滑りおりてくる。

「とんだものをお見せしましたな」

久保田がきまりわるげにつぶやいた。いやなに、と織部正が応えようと、ふかぶかと低頭して退出する。舅とふたりだけになると、息苦しかったはずの室内が寒々しいほどひろく感じられた。

全身から力が抜け、手をつかず座っているのがやっとだった。背のあたりが丸くなっているのは分かっていたが、のぼすことができない。

「武士はみな、従容として死へおもむくもの」

ふいに織部正が唇をひらいた。微笑ほほえんでいるようにも悲しんでいるようにも見える皺しわが、鼻のあたりに刻まれている。「そう思うていたか」

「いえ……はい」

じぶんでも、なにを言おうとしているのか分からなかった。胸のうちがひたすら重いもので塗りこめられている。織部正は、畳に降りそそぐ日ざしを見つめながらつぶやいた。

「**C** そうした者もおるが、今日のようなことは多い——身分にかかわらずな」

「……」

舅となるひとがゆっくりと面を向けてくる。ふぞろいな双眸そうぼうが錆びた光をはなち、老いた鷹たかのように見えた。

「が、わしはそれを悪いとは思わん」

「え——？」

「むろん、良いとも思わんが」

織部正がいたずらっぽく笑った。いつもの通り、そうするとひどく顔が歪ゆがむ。首をかしげていると、舅となるひとの笑みがさらに大きくなった。

「たいていの者は、そうそう見事に生きられぬということか……ついでに申しておくが、いまの男には子などおらぬよ」

(注) 家宰——家の仕事を、その長に代わってとりしきる人。

問1

「^a精悍」の本文中における意味として最も適当なものと、bに入る言葉として最も適当なものとを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。解答番号は、**マーク式** 24 ～ 25。

「^a精悍」

24

- ① 積極的であり、雄々しいさま
- ② 勇ましく、鋭い気迫にあふれるさま
- ③ 丈夫で、男らしいさま
- ④ 元気で、頼りになりそうなきさま
- ⑤ 強そうで、荒々しいさま

b

25

- ① 肝
- ② 膝
- ③ 胆
- ④ 腑ふ
- ⑤ 胸

問2

X Zに入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。解答番号は、**マーク式** 26 ～ 28。

X

Z

X

26

- ① あかあかと
- ② くろぐろと
- ③ しらじらと
- ④ あおあおと
- ⑤ ふかぶかと

Y

27

- ① おだやかに
- ② しめやかに
- ③ かるやかに
- ④ ほがらかに
- ⑤ ひややかに

Z

28

- ① きらきらと
- ② じろじろと
- ③ にやにやと
- ④ ぎらぎらと
- ⑤ ひやひやと

問3

本文中に描かれている場面の時と場所を述べた組み合わせとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。解答番号は、**マーク式** 29。

- ① 夏の日の夕刻・黛家
- ② 夏の日の朝・黛家
- ③ 夏の日の午前・評定所
- ④ 秋の日の午前・評定所
- ⑤ 秋の日の午後・評定所

問4 「A」ひとの心もちには応えよ」は、清左衛門が新三郎に向かって述べた言葉である。清左衛門はこの発言で、どういうことに対

して何を伝えようとしたのか。「栄之丞」「新三郎」「織部正」「清左衛門」の四語を全て用いて、互いの人間関係が分かるように一〇〇字以内で説明しなさい。解答番号は、記述式 5。

問5 「B」三間ほどむこうで背を縮める男」についての説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マ

ク式 30。

- ① 三十石どりの軽輩であり、妻と五人の子どもがあるために生活が苦しく、そのために勘定方という自らの立場を利用して公金の使い込みを行った。
- ② 賭け事に手を出し借金を背負い込んだことがきっかけで、自らの役職である勘定方の下役の地位を利用して何年にもわたって不正を行ってきた。
- ③ 年齢は三十代の半ばであるが、十以上も老けて見え、妻と幼子を抱えての生活の苦しき故に、勘定方の地位を利用して不正を行ない公金を使い込んだ。
- ④ 三十代半ばであるが年以上に老けて見え、勘定方の下役を務めており、その立場を利用して何年にもわたって公金を私し続けしてきた罪に問われている。
- ⑤ 賭け事にはまったがために、長年公金を私してきたことが発覚し、三十代半ばで三十石どりの軽輩ではあるが、家名断絶、切腹の処分を受けることになった。

問6 「C」 そうした者もおるが、今日のようなことは多い」について、以下の各問いに答えなさい。ただしいずれも「武士」「従容」の二語は用いないで答えること。解答番号は、記述式 6。

(1) 「そうした者」とはどのような者かを、二〇字以内で説明しなさい。

(2) 「今日のようなこと」とはどのようなことかを、四〇字以内で説明しなさい。

問7 この文章の表現や内容・語りの特徴の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、マーク式 31。

① 黛家の三男である新三郎が自らの婿入り先である黒沢織部正に連れられ評定所の見習いを行う場面を中心とし、その間に数日前の黛家の夕食の場面が挟み込まれている。初めて見る裁きの場の厳しさが新三郎の目を通して緊張感をもって描かれているとともに、その厳しさにたじろいでしまう新三郎の優しさや未熟さも描かれている。

② 神山藩の筆頭家老黛家の三男である新三郎が黒沢織部正とともに評定所の裁きの場を見学する様子を、新三郎の視点に寄り添って語っている。裁きを行うのは目付役筆頭の久保田治右衛門であり、久保田は新三郎が立ち会うことに戸惑いを見せながらも、新三郎の今後に少しでも役に立つようという気配りもみせつつ裁きを展開している。

③ 大目付を務める黒沢織部正は、新三郎の父と幼なじみであり、婿となる新三郎を一日も早く一人前にしたいという思いを強く持っている。評定所の裁きの場に新三郎を伴ったのも、そのような思いの表れであるが、当の新三郎からするといささかの戸惑いとともに、何とかこの場を大過なく過ごせるようにと思っている。

④ 評定所の目付役筆頭の久保田治右衛門は、黒沢織部正が婿となる新三郎を裁きの場に同道したことに戸惑いを持ちながらも、山路作左衛門に対する裁きには、いささかのためらいもなく臨んでいる。一方、裁かれる山路の方は織部正や新三郎の同情をえることで少しでも自らの処分を軽くしてもらいたいという姑息な人物として描かれている。

⑤ 黛家の三男である新三郎の視点に寄り添って、神山藩の評定所で初めて裁きの場に立ち会う彼の戸惑いや、心の揺れ動きを巧みに語っている。三人称の語りである故に、全てが新三郎の目を通してものと言いつけることはできないが、他の人物を動物を用いた比喻を用いて表現するなどの確な人物像を語っている。

四 漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問 A～Jの各傍線部について、A～Dは漢字の読みをひらがなで、E～Jはカタカナに相当する漢字を楷書で、それぞれ答えなさい。
なお、送り仮名が必要なときは、それも書くこと。解答番号は、記述式 7 A～J。

- A 怨恨による犯罪。
- B 凄惨な事態に陥る。
- C 一人娘を溺愛する。
- D 失敗を嘲る。
- E キョウキンを開いて語らう。
- F 最高シユクン選手。
- G セツジヨクを果たす。
- H 欲望が心にヒソム。
- I 何を言われてもバジトウフウだ。
- J セイダク併せ呑む。

(問題 終わり)

（
余
白
）

（
余
白
）